

図書報だより

号数 第 29 号
発行日 昭和50年3月10日
編集 島根県立図書館
集行 松江市内中原町52
刊 行 TEL (0852) 22-5725
印刷 衛高浜印刷所



(島根県身体障害者総合指導所に配本)

50年度の図書館事業について

昭和49年度も物価狂乱のあわただしさのうちに過ぎさり、昭和50年度を4月に行なわれる地方統一選挙とともに、迎えようとしています。

我々職員は、図書館事業の今日における重要性と多くの方々から寄せられている期待にそいたいと、昭和50年度こそ大いに飛躍してゆきたいと考えています。

しかしながら、予算の裏付けとしては、緊迫した地方財政事情のもとに圧縮をうけ、期待はずれの面目ない結果となってしまいました。

予算総額は、昭和49年度現計予算に比し、10.4%増の42,561千円で、その内容は、館外奉仕費 1,963千円(0%)、図書館活動費 444千円(0%)、視聴覚奉仕費 709千円(8%増)、館内奉仕費10,154千円(2.3%増)、資料整備費20,944千円(15.8%増)、古文書整備費2,610千円(7.9%増)、と図書館運営費の管理運営費14,876千円(6.5%増)、となっています。

事業の詳細については後述しますが、査定で認められた新しい事業としては、盲人用録音テープ作成費、公文書取扱等講習会位で、まことに些やかです。しかし、従来から実施してきました事業については、50年度も継続して行きますが、予算の範囲内で多少の変更を加え、少しでも内容の充実したものにして行きたいと思っています。

なお、今秋10月22日～24日には、県民会館を主会場とし、18部(分科)会を設け全国の各地から1,300人の図書館に関係ある方を集め全国大会を開催することになっています。もって島根県の読書振興に役立てば幸いと思います。関係ある皆様方の絶大なるご協力、ご援助の程をお願いします。

島根県立図書館次長 平野 徹



広瀬 緋 と 私

天 野 圭

「若し、火事になったら第一番に藍がめの上に畳を伏せて敷き並べなさい」

所用で家を留守にして出る時、母は忘れることなくこの注意を繰り返した。焼け落ちた瓦や柱ばりの下でも畳は藍の水分を吸い、焼けることなく安全にかめを守り仕事が容易に再開できるというのである。紡績糸は井戸に投入し、染めた糸は蚊屋に包んで避難したという広瀬大火被災の体験を私は何度聞かされたことだろうか。母が亡くなって、すでに15年、幸いにも藍がめはまだ一度も畳を冠らせられないでいる。

大正4年4月27日の広瀬大火によって、松平藩3万石の城下町は烏有に帰し、産業経済は壊滅的打撃を受けた。明治末期より機械織産地に押され、不振を続けていた広瀬緋にも再起不能の痛手を与えられたのである。火元に近かった天野紺屋も例外ではなかった。父母が災厄の傷をいやして直立った後も紺屋の火災対応策を私の耳にタコができるほど活かさねばならなかったのも、再建の苦難がいかに骨身にこたえたかを如実に示していると思う。広瀬緋は、焼け残った数軒の織元が細々と生活を続けるに過ぎなくなったのである。

広瀬緋は文政年間、長岡貞子という婦人によって創始されたと伝えられているが、その真疑は別として藩政の終り、文久の頃の記録に織元某の記事があり明治以降、町の主要な産業として発展してきた。織元十数軒、藍染紺屋17戸があり、町内各戸に織元の出し機を備え、緋糸のアラソ（麻の皮を蒸して精製したもの）結えをする家庭を含め町内ほとんどの家庭が緋に関係する副業をしていた。明治37・8年頃の最盛時には年産10万反を越え、販路も県内はもちろん山陰地方、大阪、遠くは奥州、北海道にまで及んだという。また、先進地よりの技術導入、織機の改良緋伝習所を設けて織工の育成も行った。あるい



は、同業組合による製品査定、共同販売等緋生産地としての体制も整い町周辺の農村部にも生産は広がられていたのである。

明治11年、京都市の内国勲業博覧会に出品された広瀬緋は有功章を受け、それ以来各地の共進会に巧緻な作品を度々出展、江湖の賞賛を博した。現存しているその頃の裂を見ると、よくもこれだけ面倒な手間をかけたものと感嘆する。

更に古い時代の裂には、藩政時代のお抱絵師の図案といわれる物もあり、馬の絵柄などその筆勢に特徴が現われている。

緋の模様を経糸、緯糸のそれぞれに付けて経緋、緯緋、経緯緋に区別するが、広瀬緋は経糸緯糸を白く幾何模様として陽となし、その傍らに緯糸の絵模様を組合せて陰とした、複雑精巧なものが多く手間のかかる手織機でないと織り難い。これも機械化に遅れる大きな原因だった。また、広瀬の大柄、備後の中柄、久留米の小柄といわれ、布団、子負着等の大柄が多かった。絵模様には、松竹梅、鶴、亀、海老のめでたいもの、菊、牡丹、蝶、鯉、虎等の動植物、コーモリ傘、連隊旗等、時代を反映したものもある。製織技法のうち、特記すべきは、緯綜台による整経、型はけ、結え方で、後年島根県や国から無

形文化財として選定されるに至った独得の手法であり、精巧な絵模様を間違いなく結えることができ、また場所を取らないので各家庭の内職に適し、手織時代の大量生産方式としては、これに勝る方法は考えられないものであった。しかし、他の緋産地が漸次機械化に進むと価格の面で太刀打ちできないまま、次第に衰微に向い、大正4年の大火に設備を焼失、企業としての広瀬緋はほとんどその幕を閉じるのである。だが、数次の伝習所開設により、機織の技術は広く町内外に伝播され、近在農家の主婦はほとんど各戸に機を備え、自家用織物を生産するようになっており、機を織れるのが嫁入条件の一つにまでなっていたのである。雪の降る頃、農閑期になると、トントンガラリの機音がどこの家からも聞かれ、隣の緋のできばえが囲炉裏の話題になるのであった。一本一本の糸に親心を込めて織り上げた緋や縞を着せてもらった幼い頃を、暖かく思い出す人も当地方には多い。大火の痛手から天野紺屋が立ち直れたのもこの自家用織物の受託によってであった。

農家の作業衣として喜ばれた緋や縞の藍染は古く印度から始まっている。日本でも延喜式にすでにその染色法が記されているが、木綿が庶民の衣料とな

った江戸期以降最も普遍的な条件だった。麻木綿の植物繊維には特に染着しやすく、古来『藍より出て藍より青し』の諺通り、糸を浸したり、絞ったり何回も繰返すうちに、段々濃くなり遂にはその藍液の濃度より濃く染まるのであるが、そのため、糸は強度を増し藍染した糸で織上げた着物は洗濯、日光によく耐え、色のあせ方も美しい。藍染の脚絆を着用すれば、その香に長虫も寄りつかないといわれてもいる。

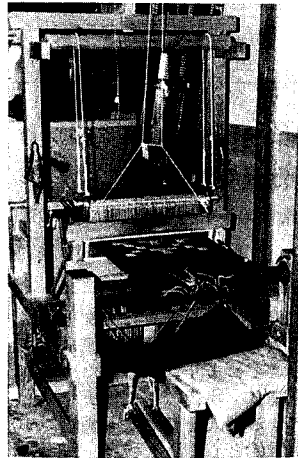


紺屋の忙しいのは、12月から翌年3月までの農閑期である。子供の頃の私は、藍染の紋り竹がセメント土間に落ちて鳴る「カランカラン」の音で目覚めるのが日課だった。父は朝4時半に起き、まずその日の藍の調子を見る。紫紅色の華（藍のしぼり泡）を浮べた藍液の表面は電燈の光を反射してキラキラ輝いて見える。寒い朝はその水面からユラユラ湯気が立ち上ってくる。火壺（藍がめ4本の中心に1個ずつ炭を入れて暖房する）の火を掻きさて、職場に続く床の間の火鉢に炭を山と盛り上げ火種を移す。銅火鉢の縁が熱くなり室温が高くなった頃、若い三人の住込職人を起こし仕事にかかる。やがて6時。通いの頭職人が出勤してくると、父は安心してこたつにもぐり1時間程仮眠するのが常だった。時々、火鉢の隅の灰の中に薩摩芋を埋めておき、起きたばかりの私にホカホカの焼芋をほおばらしてくれた。職人達は、踏まえ竹、絞り竹の2本の竹と手鉤を巧みに使って薄い藍から濃い藍へ染糸を浸しては絞り、風を切っては（空気に触れて酸化させること）、又浸しの工程を何回も繰返す。弱いアルカリの藍液から絞り上げられた糸は私の目の前で黄褐色から黄緑・緑・浅黄色と酸化するに従って変化していく。美しい。途中で酸化を止めたらと思うほど綺麗な緑色である。この作業を繰返すこと20数回、糸は黒に近い濃紺色に染上がるのである。染めるのは大抵午前中で終り、午後は翌日の準備をする。家毎のエフの付いた多様な紺糸を、紺用、無地用に別け、紺は大、中、小柄毎に組合せ、フノリに浸して絞って置く。紺の防染作業の一つである。無地の糸は170匁位を1本の踏まえ竹に通す。これが絞るのに手頃な糸の量である。一番大事なのは藍の調子を整えることだ。温度、湿度・作業量によって微妙に変化する藍液を舌でなめて、あるいは石炭や苛性ソーダを加えてアルカリ度を回復し、あるいは発酵を促進するためにナヤン

（メリケン粉を湯で煮たもの）を注入する。古くなり薄くなった藍は捨てて、新しい藍を仕込む。新しく仕込んだ藍は2、3日で赤紫の華が咲く。十分発酵が進んで1週間位で染め始める。これから3、4日は藍の香も強く色も鮮麗で、俗に藍の出端も一盛りといわれている。明日の準備を終って早目の入浴、食事、夜は早寝だった。忙しい2月中の1日を休んでコーヒメ様の祭りをする。藍染の神様は木花咲耶姫命。この手の厚い御加護に感謝して職場の神棚に神酒を供え直会を戴く。赤貝飯に大根ナマスの他、種々のごちそうに飲をつくした。目に見えぬ発酵菌の働きで藍は良くも悪くもなる。技術だけでは解決できない藍加減は、やはり神様のお力にすぎらなければならなかった。

昭和21年戦争から帰ることができた私は、家業の藍染紺屋を継いだ。父はその前年、すでに亡くなっていたので、全くの手さぐりで藍の発酵に取り組んだのである。戦争の直後だから資材も不足しており、泣きたいような日もあったが、色々善意の人に支えられてどうやら今日に至っている。当時は衣料品も著しく不足していたので受託の染物はほとんど農家の自家用織物になった。

日本経済の復興が進むにつれ衣料品も化学製品に移り、農家もまた年中仕事が絶えないようになって、織物をする主婦も急速に減少していったが、代って、藍染や紺が民芸ブームののってくるのである。昭和36年、広瀬町では広瀬紺振興会が組織され伝統ある広瀬紺の復興がはかれることになった。島根県文化財保護専門委員会の調査の結果、翌37年県の無形文化財に指定されたのである。『桃咲くや広瀬紺の



故里に」隣村出身の大田直行氏より寄せられた祝句である。45年日本万国博覧会に出品、47年4月記録作成を講ずべき国の無形文化財として選択され48年末より県教育委員会によりその措置がとられている。一方、45年2月再度、広瀬紺伝習所を設けることとなり後継者養成もその緒

につきつつある。永年広瀬紺の織工として卓越した技術を持ち、今なお元気に仕事に励んでおられる方は次の3名の婦人である。

広瀬町八幡町	花谷	初子
広瀬町本町	松田	フサオ
安来市利広	渡辺	コウ（広瀬町新宮出身）

新年度の図書館事業についての詳細

県立図書館各種講座受講生募集要項

4月より開講、どなたでも気軽に受講できます。

申込方法 松江市内中原町52、県立図書館振興課(22-5730)まで、電話またはハガキで、お申込みください。(住所、氏名、電話、希望講座を連絡)
締切日 昭和50年3月31日

	図書館婦人教室	日本文化講座	古典文学を 読む会	県立図書館 サロン	古文書を読む会	
	松江地区				入門講座	中世・近世講座
開講日	第3火曜日	第2火曜日	第2.4木曜日	最終金曜日	第1土曜日	第3土曜日
時間	10:00~15:00	10:00~ 12:00	14:00~ 16:00	17:30~ 19:30	13:30~ 15:30	13:30~ 15:30
会場	県立図書館	県立図書館	県立図書館	県立図書館	県立図書館	県立図書館
募集人員	新規 30名	—	追加 30名	追加 10名	追加 30名	追加 30名
定員	30名	40名	40名	25名	50名	50名
期間	1年	1年	1年	1年	1年	1年
対象	一般婦人	一般婦人	一般婦人	青年男女	一般	一般
経費	無料	テキスト代を 除き無料	テキスト代を 除き無料	無料	テキスト代を 除き無料	テキスト代を 除き無料
講師	①県立図書館長 速水保孝 島根女子短大教授 檀原そえ子・外	県立図書館 奉任課長 藤岡 大拙	元広島女学院 大学教授 宍道 達	県立図書館長 速水 保孝 、 外	県立図書館 嘱託 桜木 保	(中世) 県立図書館 奉任課長 藤岡 大拙 (近世) 出雲高校教諭 藤沢 秀晴
講座の趣旨と内容	健康で文化的な婦人生活を営むため、その契機を読書に求め、本に親しむことにより豊かな家庭生活を築き、現代の社会生活に適應する婦人を育成することを主目的とし、あわせて、地域読書会のリーダーとしての研修も含めて、講義や読書会を開く講座です。毎年、この講座を了えられた方々は、自主的にOBをつくり、活動しておられます。	日本文化発展の概観に役立てるため日本文化史をひもとく講座です。現在、郷土の歴史を日本歴史とのかわりあいの上になつて、平易に講義されています。	原典のもつ文章美や、その時代の人間の姿を理解し、味わうため、古典文学の原文を読む講座です。現在、源氏物語の講義が行われています。	青年のもつ真しな探究心を養い、これを伸ばすため、読書をとおして、人生や社会の諸問題を論じ、自由な話し合いの場所を持つものです。今年の1月から始まりました。	県立図書館が編集した「古文書ハンドブック」その他のテキストにより、初歩から手ほどきし、古文書の読解力養成につとめる講座です。	入門講座を終えた程度の読解力をもつ人を対象に読解だけではなく史料の背景にある郷土史の研究にも及ぶ講座です。

事業名	内容	対象	会場	備考
古文書特別講習会	古文書の重要性の認識を全県的に普及するため、市町村教委の職員等を対象に解説法、整理法等の講習会を行なう。	市町村教委 職員 希望者	県立図書館	3月
県立図書館 こどものつどい	こどもに対する読書普及と図書館にしたしみをもたせるため、こどものつどいを開催する。こどもの読書週間(5月)クリスマス(12月)の2回を館内で行ない、館外では一日図書館等で県内各地に行き随時行なう。	幼児生 児童徒	県立図書館 その他	5月 12月 その他

全国図書館大会を島根県で開催

昭和50年度の全国図書館大会を、今年10月22日から24日まで3日間松江市で開催することに決定した。その日程、部会などあらまは次のとおりである。

この図書館大会は、明治39年に第1回を東京で開催して以来、途中、戦争などで途切れたことはあるが、今回で28回を迎えるもので、図書館に対する期待の高まる中で、とくに、島根県での開催を有意義にしたいものである。

関係者の参加と支援を期待します。

1. 名称 昭和50年度全国図書館大会
2. 会期 昭和50年10月22日(水)～全年10月24日(金) 3日間
3. 場所 島根県松江市〈主会場〉島根県民会館大ホール
4. 主催 島根県教育委員会、日本図書館協会、松江市教育委員会、島根県読書推進協議会
5. 後援 文部省、国立国会図書館
6. 日程

		9.00	10.00	11.00	12.00	13.00	14.00	15.00	16.00
1	10/22(水)	受付	開会式	出雲文化をさぐる(講演と民俗芸能)	休憩 昼食	憩食 移動	受付	部	会
2	10/23(木)	受付	部	会	〃	全体会	閉 会 式		
3	10/24(金)		施設、奉仕活動見学		休 憩 昼 食		施設、奉仕活動見学		現地解散

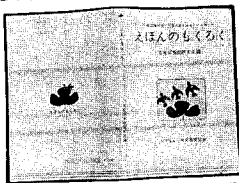
7. 会場 島根県民会館、島根県庁、自治研修所、教育会館、むらくも会館、県立図書館
8. 部会

(1) 公共図書館(3分科会) 〈A公立、B私立、C読書施設〉	(6) 専門図書館(3分科会) 〈A企業団体 B地方議会 C官公庁〉
(2) 学校図書館(3分科会) 〈A幼児の読書 B読書の習慣づくり C目的にあった読書〉	(7) 郷土の資料
(3) 短期大学図書館	(8) 図書館学教育
(4) 高等専門学校図書館	(9) レファレンス・サービス
(5) 大学図書館	(10) 整理技術
	(11) 図書館の問題研究
	(12) 身体障害者への図書館サービス

児童図書館員と文庫のおかあさんがえらんだ
“えほんのもくろく”

児童図書館研究会編、日本図書館協会発行 700円
子どもの本の目録は、これまでもいろいろなところから種々刊行されています。しかし、絵本だけの目録を、読書を通じて毎日のように子どもと接している図書館員や文庫のおかあさんが全国的な規模で作ったのは、これがはじめてです。集められた作品リスト 1,171点から特によい絵本 289点をえらび、1点ごとに解説と表紙写真を掲げ、書名と著訳者の索引もついています。

絵本を選ぶときの手がかりに、児童関係者はもとより、お父さんお母さん等多くの方々が活用されることを願うものです。



“王様の空”

リチャード・バック著 中田耕治訳
三笠書房 780円

「カモメのジョナサン」の原型とも言うべき書で著者の代表作の一つである。本書は大空へのはらかな旅にあらゆる技術と生死をかけてのぞんだ、若い飛行士の物語である。外に向かつてつき進む飛行をとおして、内なる孤独や恐怖と闘いぬこうとした人間の精神的資源の深さを、探りつづける姿を描いている。



“櫛の火”

古井由吉著 河出書房新社 980円
著者の作品テーマともいうべき「死」を大衆闘争に疲れ、恋人を病気で失った青年を主人公として描いた長編である。彼女の死体を守って、一夜、病院の霊安室で過ごした彼は、かたみの櫛をとおして、死者とのかかわり、生者である自分の存在を考える。やがて、年上の人妻と知り合い、生の現実感をつくりだすが、その人もまた、死の想念をとり消すものではなかった。



“まぼろしの戦国城下町”

桑原英二著刊。1,000円
平安末期から出雲の中心であった富田城下町は、寛文6年の大洪水によりその姿を消した。以来 300年をへて昭和41年、その遺構が富田川河床から出現し年毎に全容を現わしたのである。遺構出現から川を見近にした著者が、幻の城下町解明のため、地道な調査収集、研究を重ねた努力の結晶が本書である。川と富田の歴史、力をそいで記してある遺構と出土物の説明、随所に折り込んだ写真と図。全国的にまれな中世都市遺構を知るに貴重な一書である。



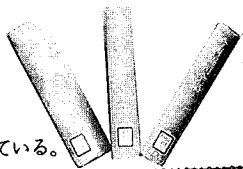
“ベトナムのダーちゃん”

早乙女勝元著 童心社 850円
プタペストで、平和を願う大集会在催された時、ダーちゃんと作者は出会います。この物語は、そのときのダーちゃんのお話をもとにして書かれたものです。かつて平和で静かなベトナムの村々が銃火のもとに一瞬にして消え去ってしまった恐怖、ベトナム人民がなぜアメリカに飽くまで抵抗するか、アメリカ兵の数々の残虐な行為、戦争の悲惨さを、分りやすく作品は説明しています。そして、今平和がベトナムに訪れようとしています、決してダーちゃんのベトナム人民の心の傷はいやされることはないということと同時に語っています。



“今西錦司全集、全10巻”

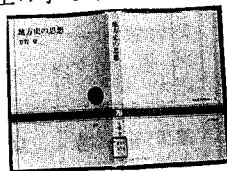
今西錦司著、講談社、各 2,600円
生物学者であり、哲学者であり、思想家であり登山家である博士の半世紀におよぶ研究足跡の体系的な集大成。登山や学問の面では、西欧的な教養を深く身につけ、一面繊細な京都文化を身につけ、生き方はつねに自然への復帰をあこがれ、自然人への解脱を志している博士は、学問の面でも、文献のからや実験室の枠を突き破って、それぞれの分野できわめて創造的な問題提起をおこなっている。



新刊
図
書
紹
介

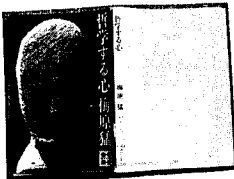
“地方史の思想”

芳賀登著、日本放送出版協会刊 470円
現在、日本人の故郷である田舎は、総合開発という名の都市化と過疎化により、従来からの生活基盤は崩壊寸前です。このような状況を前にし、今までの地方史研究法、古文書解読法、地方史研究必携のたぐいの出版物を超えて地方史研究の理念を追求したのが本書です。それは史的研究にとどまらない、地方改良、経世済民、自力更生の学であることの訴えです。土に刻まれた歴史、いいかえると父祖の努力の跡の記述と未来に子孫を残す土地を今、如何に耕すかが地方研究の眼目であるとの訴えです。



“哲学する心”

梅原猛著、講談社、280円
端的に言って、著者はヨーロッパ文明は行きつまったと考える。デカルト以来の近代ヨーロッパ哲学の人間偏重、物質偏重は19世紀以後、様々な矛盾をあらわし、今や人類の行方すら危ぶまれる状態である。このような時、日本文化、特に仏教の教えこそは、今日の思想界に新しい息吹を吹きこむであろうという。従来の無味乾燥な哲学から、味のある生命の哲学をめざす著者の意欲のほどがうかがえる好著である。



○「**島根県の歴史**」 内藤正中著 山川出版社
島根県の歴史を政治史や経済史を中心に述べてある。特に近世以後については詳しく記されており、わが県の歴史を知るには最適の書である。

○「**愛のながれにあるもの** ひとり心に育てる才知」
草柳大蔵著 大和書房
男と女が結びつくとき、愛が、希望が、不安が、苦悩が生まれる。その微妙な心理の底に流れる「本当のもの」をくみあげて、さわやかに生きる指針と知恵を伝える書である。

○「**いのち流れるとき** ひとりの女として妻になる才覚」

藤原てい著 青春出版社
女性にはさまざまな生きかたがある。平凡に生きる人、厳しく生きる人、理想に生きる人、情熱的に生きる人、この本は、女性の生き方、人生の目的などを述べたものである。

○「**神近市子自伝 わが愛わが闘い**」
神近市子著 講談社
女性解放に賭け、恋に身を燃やしたひとりの女の波乱の生涯を赤裸々につづる。平塚らいてうらとの交遊、婦人記者時代、大杉栄との刃傷事件、獄中生活、売春防止法の内幕などについて語った貴重な記録である。

○「**市民のための生涯教育**」
吉田昇、諸岡和房、宮坂広作者、日本放送出版協会

学校だけが教育の場であるという考え方は、過去のものとなりつつあるが、本書は、ユネスコが提唱し、新しい教育の世界的なうごきとなっている生涯教育のあり方を述べたものである。

○「**サンダカン八番娼館 底辺女性史序章**」
山崎朋子著 筑摩書房

英領北ボルネオの港市サンダカンの娼家で、我が身を売って青春を送り、今は天草の片隅にひっそりと暮らす「からゆきさん」。底辺女性史の確立に情熱を注ぐ著者が、彼女と生活を共にしてその生の声を聞き、埋もれた歴史に光をあてた書。

○「**われに背くとも**」 芹沢光治良著 新潮社
若き日に訣別した恋人とのおもいがけないめぐりあい。思想に賭ける若者と心の断絶に、人生の苦澁を知る老学者の理想と現実とのくい違いを「人間の運命」の続編として描いている。

○「**紀ノ川**」 有吉佐和子著 新潮社
紀州の素封家を舞台に、明治、大正、昭和と三代にわたって、激しく生に挑戦した女の系譜を、深い色をたたえて、静かに平面的に流れている紀の川をバックに描いている。

○「**海辺の光景**」 安岡章太郎著 講談社
高知湾をのぞむ海辺の精神病院。そこに入院して

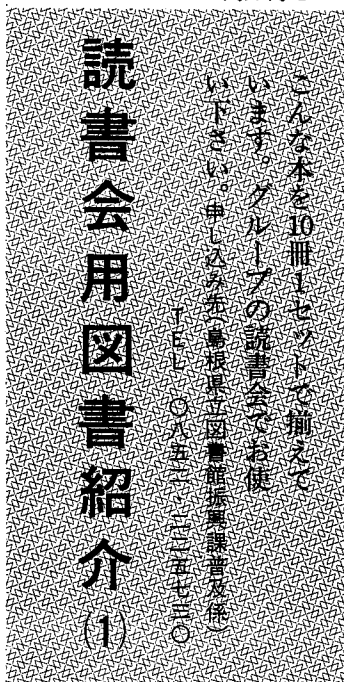
いる母親のもとに駆けつけた息子が、母親が死ぬまでの9日間にみた心象風景を過去にまでさかのぼって描いている。

○「**月の光**」 井上 靖著 講談社
著者の母親が86歳になり、もうろくの仕方がひどくなり、子供たちの間で順番にひきとり、面倒をみるという私小説。他に、「花の下」「墓地とえび芋」を収録。淡々と、日常生活の模様を描いている。

○「**夏の花**」 原 民喜著 晶文社
疎開先、広島で被爆した若者が、被爆前後の広島と避難先の郊外のようすを即物的な文章で描いている。他に、「壊滅の序曲」「廃墟から」を収録。

○「**日本婦道記**」 山本周五郎著 講談社
因習的な家や夫のかげにかくれて、つきることのない努力をかさねた日本の主婦像を追求。併せて、日本の庶民、日本の家、日本人のモラルをほり起したものである。

○「**氾濫**」 伊藤 整著 新潮社
現代人のさまざまな生活や偽装、金銭、名誉、地位、セックスへの欲望を大胆に描く。
人間の真実の姿、エゴイズムの醜さ、いやらしさを徹底的に追求している。



視聴覚係からおしらせ

新しいフィルムの紹介

伝承の昔話 一心のふるさと—

カラー 40分

今日は、二十日様、毎月開かれる壇下の講で昔話を語るならわしが今も続いている。今日の話者は松田ミイさん、72歳。多くの昔話を知る数少ない語り手の一人である。話は「嫁と火種」。

この話は松田さんが14歳の時、松田家に養女に來た前の晩、母がお別れに語りしてくれた話だという。

昔話の起源は明らかでないが、幾世紀を村の歴史と共に歩み、今なお親しまれているのは、冬の炉ばた生活が長く、そのときに盛んに語られ、伝承の根をしっかりとおろしたのであろう。

そこで昔話の土壌である村の生活、生きている語りを通して、伝承の昔話を見つめてみる。

稲作が主な仕事のこの地方は、冬季を除いては目の廻る忙しさが続き、とても昔話を語る暇はなかったのであろう。

「春語ると口がさける」

「夏語ると貧乏になる」

「雪の降るとき以外語るな」

と昔から言い伝えられ、労働と生活の厳しさを物語っている。

収穫が終ると早手まわしに冬仕度をし、長い冬に備える。そこには冬の単調さを吹きとばし、忙しさから解放された最も充実した生活がある。それは自然がつくり出した生活の知恵であろう。

おじいさんは薪取りに山へ登った。子供たちは雪そりや竹スキーで遊びに熱中する。

波多野ヨスミさん、65歳がこたつを囲み、孫たちに昔話を語っている。話は「三枚の札」。波多野さんは聞き覚えた昔話をノートに書きとめ、すでに400話を越したという。

波多野さんは伝承の系譜を「冬中、いろいろばたで、夜なべをしながらかつてきて、その両親はひいばあさんから聞いた——、波多野家に嫁いでからは、子供に語り、今は子供も

嫁いでしまい、毎日孫たちに語っている——と語り、幼時の思い出を「語ってくれた父母の顔が、声が、そのまま思い出されて涙がこぼれるのです」と言う。

また松田さんは、「母は昔話をしたあとよく言い含め、良いことをすれば必ず報われる——と語り、正直な良い子になるようにと願って語ってくれたんでしょう。その母の心を、いつも思いつづけてきた——、子供の頃はお宮様や雪釜で、子供同志身体を寄せ合い、俺はこれある、あれあるとみんなで昔話を語り合い、幼い子供は歌をうたいました」と言う。

祖母や母から聞いた昔話は、今なお二人の心をよぎる。この頃の思い出は終生忘れることのない心のふるさとである。以上がこの映画のあらましです。

昔話を聞いて育った人達にとって、父母の肉声を通して聞いた昔話は、心の奥にふるさとへの愛着となって生きているものです。

また昔話といえば、地方の伝承とされているのが常ですが、都会に住む人や、現代人にも語りつぐべき題材がいくらかでもあるはずで

す。身近にある話しを語りつぐということで、今、親としてできることはなにかを考え、そしてお母さんが小さかったころの話など、子どもに語り伝えていく新しい民話の創作などを通し、忘れかけられている民話や昔話を、もう一度見直していただきたいと思ひます。家庭教育学級や高令者、青年学級等の学級講座の中や、青年団体や老人クラブ等のサークル活動の中で、このフィルムを通して、昔話しがわたしたちに果してきたものは何か、またテレビの普及で昔話を語り聞かせる機会の少なくなった現状について、みなさんで考え、話し合ってみてください。

そして郷土の文化遺産を次の世代にどう伝え、どう残していったらよいかをみつけ出す手がかりにいただきたいと思ひます。

